

## 荻生徂徠の音楽に関する新出資料五点とその意義について

——享保五年に有馬兵庫頭の問いに答えた書、「三五要略考」及び音楽に関する覚書、  
琴（七絃琴）に関する文書、吉水院旧蔵楽書に関する文書、中根元圭に宛てた書簡——

山 寺 美紀子

はじめに

江戸中期の大儒、荻生徂徠（本姓は物部、修姓は物、字は茂卿、通称は惣右衛門、一六六六―一七二八）は、聖人の礼楽たる聖代の古楽を求めて、音楽の研究を行い、『楽律考』、『楽制篇』、『楽曲考』、『琴学大意抄』、『幽蘭譜抄』等の音楽に関する著作を残した。<sup>1</sup> また晩年には、八代將軍徳川吉宗から、明の朱載堉（鄭世子）撰『楽律全書』の校閲など、楽書に関する仕事を命じられたことが知られる。<sup>2</sup> しかしながら、徂徠の音楽研究の詳細や実践の実態、及び音楽に関する事跡については、未詳のことが多く残されており、その音楽著作の全貌も、未だ明らかにはなっていない。

このような状況に鑑み、徂徠の音楽に関連する一次資料の調査を行ってきたところ、このたび、新出資料五点が確認できたので、ここに翻刻・紹介し、各資料の意義について述べてみたい。

先に、本稿で取り上げる五点の概要を述べると、次のとおりである。

一点目【資料一―一】【資料一―二】は、享保五年（一七二〇）二月に、徂徠が、將軍吉宗の側近である有馬兵庫頭からの問いに答えた書二通の写しである。その内容は、中国古代周の尺度「周尺」、及び歴代の楽律（音律）<sup>3</sup>・尺制の変遷に関して述べたものである。二点目【資料二―一】―【資料二―六】は、「三五要略考」と題する著述と、その後に附す音楽に関する覚え書きである。「三五要略考」の内容は、日本の雅楽琵琶譜集成である『三五要略』の一伝本について述べたものであり、享保十二年（一七二七）の著述と推定される。三点目【資料三】は、琴（七絃琴）<sup>4</sup>の古資料等に関して述べたものである。四点目【資料四】は、享保十二年五月に、吉水院旧蔵楽書について述べたものである。上記四点は、いずれも荻生家所蔵文書に収載されているものであるが、

筆者は、このたび、東京女子大学図書館丸山眞男文庫が蔵する荻生家所蔵文書の写真複製版を閲覧し、右四点を確認することができた。荻生家所蔵文書そのものは未見である。本稿では、写真複製版を用いて、翻刻・紹介する。

五・五目（【資料五・一】）（【資料五・四】）は、関西大学図書館泊園文庫所蔵の藤澤東畠自筆稿本から見出した、徂徠の書簡四通の写しである。筆者の推定では、享保十年（一七二五）、徂徠が幕府から朱載堉撰『楽律全書』の校閲を命ぜられた時期に、暦算家の中根元圭に宛てて書いた書簡とみられる。本稿では、この書簡四通から、音楽に関する部分を翻刻して紹介する。

# 一、享保五年二月に有馬兵庫頭の問いに答えた書二通

## ――【資料一・一】【資料一・二】

【資料一・一】【資料一・二】は、徂徠が享保五年二月二十五日と二十七日に、有馬兵庫頭からの問いに答えた書二通の写し（紙数四丁）である。一通目冒頭には「庚子二月廿五日有馬兵庫頭マテ出ス」と、二通目冒頭には「二月廿七日兵庫頭ヨリ再問ノ答」と記す。「有馬兵庫頭」は、將軍徳川吉宗の御側御用取次を務めた有馬氏倫（一六六八～一七三六）、「庚子」は享保五年（一七二〇）とみて問題ないであろう。

前述のとおり、筆者は荻生家所蔵本そのものは未見であるが、【資料一・一】【資料一・二】は、東京女子大学図書館丸山眞男文

庫所蔵荻生家文書の写真複製版「徂徠印譜、周尺、正徳元年までの荻生氏勤之覚、三五要略考ほか」「登録番号〇一九七二七九」に収載されており、荻生家に蔵されてきたものと認められる。<sup>④</sup>

ところで、かつて丸山眞男氏は「太平策」考<sup>⑤</sup>にて、「享保五年二月 徂徠、周尺・律・度量衡などについて有馬兵庫頭と問答を交す。」と述べられたが、これが何に基づくのか、根拠となる資料は示されなかった。そのためであろうか。その後、この事項については、徂徠の年譜には取り上げられず、一部の論考に引用されるのみであった。<sup>⑥</sup>つまり、右の丸山氏の記述は、今日まで、資料からの実証ができずに、深化あるいは採用されなかったと言えようが、ここに取り上げる【資料一・一】【資料一・二】が、まさに、その記述の根拠となる資料であったと判断される。実際、本資料を収録する写真複製版の表紙に、丸山氏のメモ書きがあり、その中には、「周尺についての有馬兵庫頭との問答（享保五年）」と記されている。

さて、本資料の内容は、丸山氏のメモ書きにもあるように、主に周尺に関するものである。音楽に関することは、二通目（【資料一・二】）の第一条に、楽律について言及されているのみである。ただし、周知の如く、古来、中国では、音律の基準音となる「黄鐘」の律管は長さ九寸と伝えられ、尺度の基準と結びつくものとされてきた。そこで、周代の一尺が実際如何ほどの長さであったかという問題は、周代の楽律の基準音の音高が実際如何ほどの高

さ(ピッチ)であったかという解釈に直結し、周尺に関する議論は、そのまま聖代たる周代の楽律、ひいては聖人の楽の実態への探求につながるものである。よって、本資料は、分野としては度量衡研究に属するものであるが、徂徠の楽律研究とその事跡を知る上でも貴重な資料であるとみなし、全文を翻刻して取り上げる。こととした。

## 【資料一】<sup>(7)</sup>

庚子二月廿五日有馬兵庫頭マデ出(ダ)ス

一 周尺ノ一尺ハ、唐ノ大尺ノ七寸一分九釐六毫三絲ナリ。唐ノ大尺ハ、明ノ營造尺、即(チ)、日本ノ曲尺ナリ。唐ノ大尺ハ明ノ營造尺ナリト云(フ)コトハ、『領宮禮樂疏』ニ見ユ。日本ニモ、王莽ガ大泉・開元通寶錢、今存ス。校合スルニ差ナシ。周尺ハ唐大尺ノ七寸一分九釐六毫三絲ナリト云(フ)コトハ、『隋書』ノ律歷志<sup>(8)</sup>ニ據テ、周尺ヲ以テ、後周ノ玉尺ヲ求メ、又、『通典』・『律呂新書』ニ據テ、後周ノ玉尺ヲ以テ、唐ノ大尺ヲ求(メ)テ、其(ノ)數ヲ得ルナリ。

一 『領宮禮樂疏』・醫書『類經』<sup>(9)</sup>ナドニ、横黍・縱黍・斜黍ト云(フ)コトヲ立テテ、黃帝・夏・殷・周・漢ノ尺、不同アルコトヲ云ヘリ。其(ノ)說ニ、周尺ハ唐大尺ノ六寸四分ト云(ヘ)リ。妄說ナリ。古來、尺度ノコトハ、『隋書』律歷志ヨリ委(シ)ク的(ラ)カナルハナシ。周・漢・六朝、差別ナキコト明

(ラ)カナリ。『領宮禮樂疏』ニ云ヘル夏・殷・周ノ尺ハ、『通鑑外紀』<sup>(10)</sup>ヲ據トス外ニ、タシカナル明證ナシ。後世ノ書、怪誕ノ談、多ケレバ、信用シガタシ。黍ヲ累ネテ度トスルコトハ、『漢書』律歷志ニ出(デ)タルコトニテ、モト度ヨリ量衡ヲ生ズル道理ヲ論ズルマデノコトナリ。實事トシテ、尺度ヲ求(メ)ガタシ故ニ、累黍ノ說、古來、名賢ノ用(ヒ)ザルトコロナリ。拓拔<sup>(11)</sup>魏ノ時、公孫崇・劉芳・元正等、始(メ)テ縱黍・横黍ノ算ヲ云(ヒ)出(ダ)シ、宋ノ景祐中ニ、鄭保信、又、黍ニ據(リ)テ度ヲ求メ、韓琦・馮元・丁度等ニ駁セラルルコト見ユ。

一 王莽ガ大泉・唐ノ開元錢、并(ビ)ニ日本傳來ノ曲尺モ、若干ノ年數ヲ經タレバ、些少ノ長短アランコト、ハカリガタシ。サレドモ、右ノ考ヲ以テ推(シ)見ルトキハ、律量衡等、其(ノ)外、人物ノ長短、器物ノ寸法、食物ノ分量等ニ至ルマデ、書籍ニ載(ス)ルトコロ、現今ト大抵符合スルナリ。

## 【資料一】<sup>(12)</sup>

二月廿七日兵庫頭ヨリ再問ノ答

一 『領宮禮樂疏』・醫書『類經』<sup>(13)</sup>ノ說ヲ妄說ナリト云(フ)コト、并(ビ)ニ『隋書』律歷志、委(シ)ク、タシカナリト云(フ)コトハ、各其(ノ)本文ヲ以テ研覈シ、事證ヲ以テ參考シテ、今、專(ラ)『隋書』ニ從(ヒ)テ、『禮樂疏』<sup>(14)</sup>等ヲ取ラザルナリ。本

文二就(キ)テ、一々ニ是ヲ云ハンコトハ、片言ノ盡(ク)スベキニ非ズ。且(ツ)大略ヲ以テ云ハバ、律度量衡ハ、帝王制度ノ最要ナルモノナリ。果(タ)シテ黃帝・堯・舜・夏・殷・周・漢ノ尺制ニ異同アラバ、經史ニ載セザルコトアルベカラズ。『前漢書』ニモ、律度量衡ノ相(ヒ)因(リ)テ生ズル理ヲ論ジタルマデニテ、歷代ノ異制アルコトヲ云ハズ。魏ノ杜夔、大亂ノ後、樂律ノ廢セルヲ再興シタルニ、誤(リ)アルニ因(リ)テ、晉ノ荀勗、樂ヲ正シクセントスルヨリ、俗間通用ノ尺、覺ヘズ長クナリタルコトヲ知リテ、古尺ヲ考(ヘ)出(ダ)セリ。是(レ)、古今尺度ノ異アルコトヲ論ズルコトハ、晉ノ荀勗ヲ以テ始メトシテ、ソレヨリ前二ハ、カツテ其(ノ)沙汰ナキコトナリ。ソレヨリ南朝ハ、宋・齊・梁・陳マデ、尺度ニ小々ノ異同アレドモ、皆、四、五、六分ノ間ヲ出デズ。畢竟、俗間流轉ノ訛マデノコトニテ、朝廷ヨリ改メテ尺度ヲ制作シタルコトニテハ、ナキナリ。尺度ノ長短、大(イ)ニ違ヘルハ、北朝ノ制作ナリ。北朝ハ本、夷狄ナリ。夷狄ノ音ハ濁ル。本國ノ濁レル音ヲ用(ヒ)テ、樂ヲ制作セン爲ニ、尺度ヲ長ク作りナオシタルナリ。隋・唐ノ尺、皆、北朝ヨリウケツギテ、是ヨリ尺度長短紛々ノ說、起(コ)レリ。『隋書』律歷志ニ、南北ノ諸史ヲ參考スルトキハ、此(ノ)次第分明ナリ。『隋書』ニ載セタル荀勗ガ校定セル周尺ハ、七種ノ古器ヲ以(テ)考(ヘ)定メ、其(ノ)說タシカナルユヘ、宋朝ニ至(リ)テモ、丁度・高

一

若訥・韓琦等、又、十七種ノ古器ヲ以テ參考シテ、荀勗ニ從ヒ、司馬溫公・朱子・蔡西山等ニ至(ル)マデ、洽博ノ大儒ハ皆、是ヲ用(ヒ)テ更ニ異說ナシ。然ルニ、『類宮禮樂疏』・<sup>(マ)類經附翼</sup>『類經』ニ載(セ)タル明ノ萬曆中ノ鄭世子ガ說ハ、宋ノ劉恕ガ<sup>(マ)通鑑外紀</sup>『通鑑外紀』ニ本ヅキ、拓跋魏ノ公孫崇等ガ杜撰セル縱黍・橫黍ノ算ヲ傳會シテ、別ニ縱黍・斜黍、一途ニ落(ツ)ルコトヲ工夫シテ、巧(ミ)ニ異說ヲ設ケリ。右ニ論ズル如ク、黃帝・堯・舜・夏・殷・周・漢ヨリ南朝ニ至ルマデ、尺ニ異制ナキコト、歷史ノ上、分明ナルヲ、鄭世子、其(ノ)不同ヲ云ヘルハ、一向ニ的證ナキコトナリ。且(ツ)古來、書籍ニ見ヘタル人物ノ長短、器物ノ寸法、食物ノ分量等ヲ以テ考(ヘ)見ルトキハ、『隋書』律歷志、甚(ダ)信用スベキナリ。周代ノ一歩ハ周尺八尺、又、六尺四寸ト云(フ)說アリト云ヘル間(ヒ)ハ、定(メ)テ『禮記』王制篇ノコトナルベシ。王制ノ文ニ云(ハ)ク、「古者以周尺八尺爲步、今以周尺六尺四寸爲步。古者百畝、當今東田百四十六畝三十步。古者百里、當今百二十一里六十步四尺二寸二分。」鄭玄注(ニ)云(ハ)ク「周尺之數、未詳聞也。案禮制、周猶以十寸爲尺、蓋六國時多變亂法度、或言周尺八寸、則步更爲八八六十四寸。以此計之、古者百畝、當今百五十六畝二十五步。古者百里、當今百二十五里。」ト云ヘリ。王制ハ、漢文帝ノ時、諸儒傳來ノ師說ヲ述セル篇ニテ、其(ノ)傳來ノ師說ハ、六國或(イ)ハ秦ノ時ノ人ノ

語ナリ。故ニ、本文ニ「今」ト云ヘルハ、六國秦ノ時ヲ云ヘルト、鄭玄、料簡シテ、「六國時多變亂法度、或言周尺八寸」ト云ヘリ。畢竟、六國ノ時、民ヲ培克セン爲ニ、八寸尺ヲコシラヘ、周尺ト名ヅケ、ソレニテ田地ノ步數ヲチヂメ、租稅ヲ多ク取ル計ニシタルト云(フ)意ヲ含(ミ)テ、鄭玄ガ云ヘルナリ。『史記』ニハ、秦、始(メ)テ六尺ヲ一步トシタリ、ト云ヘリ。『司馬法』ニモ、六尺ヲ步トス、トアリ。是(レ)又、六尺四寸ヨリツマレリ。但シ、六尺四寸ノコトヲ、大概ヲ以テ云ヘルニヤ。皆、步制ノコトニテ、尺制ノコトニハ非ズ。サレドモ、本文ニ「周尺」ト云ヘル故、鄭玄ガ意ニ必(ズ)、六國ノ時、八寸尺アルベシ。ソレニ對シテ「周尺」ト云ヘルト料簡シタルドモ、的證ナキユヘ、注ニ「或言」ノ二字ヲ以テ是ヲ說(キ)ケリ。

以上、【資料一―一】【資料一―二】の内容から知られる本資料の意義について、簡略に二点のみ述べておきたい。

一つは、幕府との関わりについてである。筆者は政治史について全くの門外漢であるため、見当違いの指摘となるかもしれないが、気になる点を報告すると、以下のとおりである。

徂徠が享保六年九月、幕命により『六諭衍義』に訓点を附すなどの仕事を行い、翌年の享保七年には、御隠密御用を仰せ付けられ、有馬兵庫頭宅に毎月三度出向いたことは、荻生家先祖書(由

荻生徂徠の音楽に関する新出資料五点とその意義について

緒書)等に見え、よく知られる。徂徠と將軍吉宗との接触は、その享保六年九月に始まるとも言われるが、【資料一―一】【資料一―二】によれば、享保六年以前の徂徠と幕府との関わり、あるいは徂徠が吉宗から命ぜられた学問上の用務について、更なる検証ができるのではないだろうか。周知のとおり、徂徠の楽律と度量衡に関する専著『楽律考』及び『度量考』(「度考」「量考」)は、徂徠没後に、徂徠の弟で幕府儒官の荻生北溪(名は観、字は叔達、一六七三―一七五四)を通して、吉宗に献上され、またそれらと併せて、北溪が吉宗に提出した報告書「荻生考」の中には、「楽律ノ考」「周尺ノ考」「歴代尺ノ考」など、楽律と度量衡に関するものが多く含まれている。<sup>13)</sup>【資料一―一】【資料一―二】によると、これらの用務、ないし『楽律考』と『度量考』献上へと至る過程は、すでに享保五年に始まっていたとも言えるのではなからうか。

ちなみに、【資料一―一】【資料一―二】が提出された時期の『幕府書物方日記』を確認すると、提出前の二月十二日に、尺の図を尋ねられて『三才図会』を差し上げたとの記録が見え、十四日には「三才圖繪之内……右、有馬兵庫頭殿より、器物其寸法有之候由之御書物差上可申由被仰下、差上之候所、則 上覽相濟……」とあり、十五日には「性理大全……右、差上之候處、此内尺之圖有之候哉、一覽仕候而、有之候ハ、さし札仕差上可申旨、有馬兵庫頭殿被申聞之」と見える。十四日の記録に「上覽」とあるからには、おそらく將軍吉宗が尺の図、尺度の実寸について調べて



いたと思われる。さらには、徂徠が二月二十五日に有馬兵庫頭へ第一通【資料一―一】を提出し、その中で「古來、尺度ノコトハ、『隋書』律歷志ヨリ委（シ）ク的（ラ）カナルハナシ。」と述べた翌日の二十六日夜には、「隋書律歷志……右、可差上之旨、有馬兵庫頭分申來、差上之」と見えるのも、興味深いことである。<sup>13</sup>

次に、本資料が有する二つ目の意義として挙げられるのは、徂徠の楽律と尺制に関する研究、及び『度量考』『楽律考』執筆の時期に関することである。

先にも言及したが、徂徠は享保十年（一七二五）七月、幕命により朱載堉撰『楽律全書』の校閲を行い、また、同十二年六月には、同じく幕命による『三五中略』校正を行ったことが、先祖書（由緒書）等に見える。<sup>15</sup>そして、先行研究においては、徂徠の著作『度量考』と『楽律考』が、『楽律全書』校閲御用の作業の結果できたもの、あるいは、『楽律全書』校閲を契機に『度量考』が完成し、『楽律考』は『楽律全書』『三五中略』校書の仕事を触媒としてできた、との見解が示されてきた。<sup>17</sup>これに対し、印藤和寛氏は、『度量考』『楽律考』の早期成立の可能性について、早くから提起してこられ、筆者も、『楽律考』の執筆時期が、宝永七年（一七一〇）から翌年春にまで遡り得る可能性が高いことを、弟の北溪著『楽律考解』、徂徠弟子の宇佐見瀧水（一七一〇―一七七六）著『物夫子著述書目補記』、及び徂徠の正徳元年の書簡などの周辺資料から考証してきたが、<sup>19</sup>【資料一―一】【資料一―二】も、『楽律考』及

び『度量考』の成立時期について考証する資料の一つとなり得るのである。ただし、この件については、別稿に取り上げたため、<sup>20</sup>要点のみを以下の（一）―（四）に述べることにする。

（一）【資料一―一】【資料一―二】は、享保五年の執筆である。本資料の記述内容からは、この時、徂徠が、『度量考』及び『楽律考』の骨子の一つとなっている周尺に対する自身の解釈、つまり周尺一尺が日本の曲尺（今尺）では如何ほどになるかという実長の数値を、すでに独自に算定し、確定していたことが知られる。すなわち、【資料一―一】の冒頭に、「周尺ノ一尺ハ、唐ノ大尺ノ七寸一分九釐六毫三絲ナリ。唐ノ大尺ハ、明ノ營造尺、即（チ）、日本ノ曲尺ナリ。」と述べるのが、その数値である。

（二）周尺の一尺が曲尺（＝明營造尺＝唐大尺）の七寸一分九釐六毫三絲とした数値と、その求め方のみならず、拠所とした文献、及び周尺に対する見解などは、【資料一―一】【資料一―二】に述べる内容と『度量考』に見える内容では、概ね合致していることが見受けられる。

（三）『楽律考』においても、【資料一―一】冒頭に述べる周尺の数値（曲尺七寸一分九釐六毫三絲）が言及されており、本書ではさらに、その数値から、周代の音律の基準音「黄鐘」の律管長とその音高が求められている。それが、本書における徂徠の楽論の要となっているのであるが、ほかに、『楽律

考』に述べる、基準音の歴代変遷についての見解や、黍を累ねて黄鐘律管を求める方法に対する批判なども、【資料一】の第一条に述べる内容と、合致していることが見て取れる。

(四) 以上のことから、『楽律考』と『度量考』に述べる徂徠の諸見解、及び周尺に関する自説と独自に算定した数値は、享保五年には確定しており、有馬兵庫頭からの諮問に応じるほどであったことが、明らかである。よって、『楽律考』及び『度量考』初稿の執筆、あるいは少なくとも徂徠の楽律・尺制に関する研究は、『楽律全書』校閲よりも前の享保五年以前に、すでに行われていたことが窺い知れよう。

## 二、「三五要略考」及び音楽に関する覚書

### ——【資料二一】——【資料二一六】

荻生家文書中には、版心下部に「徂來山房」と刻した用紙に書写された、「三五要略考」と題する文書（紙数三丁）、及び音楽に関する数種の覚書あるいは断片的な無題の草稿と思しき文書（紙数計十一丁）が存する。これらは、丸山眞男文庫所蔵荻生家文書の写真複製版「徂徠印譜、周尺、正徳元年までの荻生氏勤之覚、三五要略考ほか」〔登録番号〇一九七二七九〕の後半部に収録されるものである。筆者は、荻生家所蔵本そのものは未見であり、写真複製版を確認したのみであるため、これらが独立した一本の写

本であるのか、または何等かの稿本中に収載されたものであるのかは、不明である。ただし、荻生家文書中の「徂來山房」用紙に書写されたものであるからには、荻生家に蔵されてきた信用に足る資料であるとみなしてよいだろう。

ところで、「三五要略考」と題する著述は、管見では、これまで徂徠の伝記等に紹介されたことはなく、日本古典籍総合目録データベース（国文学研究資料館）にも見えない。紙数わずか三丁であり、著作とは言えないものであるから当然ではあるが、以前、計画されていた、みず書房の『荻生徂徠全集』第八部音楽論と河出書房新社の『荻生徂徠全集』第七卷（いずれも未刊）の音楽書目中にも含まれていない。ということでは、まずは「三五要略考」及びそれに附載する覚書等の文書が、徂徠の著したものであるか否かが問題となろう。

このたび、その内容を、徂徠の音楽に関する他の著述や事跡と照らし合わせて検討したところ、見解に明らかな共通性が見られ、研究対象も想定内、あるいは知られる範囲内であること、また、「三五要略考」の推定される執筆時期が徂徠存命中であることから、これらは徂徠の著述である可能性が極めて高いと判断した。ただし、徂徠の音楽研究に関しては、弟の北溪が共に行った例が往々にして見られるため、北溪の手が入っている可能性も考えられる。しかし、いずれにしても、徂徠の音楽に関する資料であると判断されるので、ここに翻刻・紹介する次第である。

なお、以下の翻刻では、底本において改訂ないし二行以上空いた箇所を、各文書間の区切りとみなして、それぞれを【資料二一】～【資料二一六】に分類した。

# 【資料二一】<sup>(2)</sup>

## 三五要略考

- 一 作者、大政大臣師長公ト云(フ)ハ、宇治ノ惡左府ノ二男、妙音院殿ト號ス。管絃ノ達人、世ニ隱レナシ。保元ノ比、土佐國ヘ配流(ノ)故、土佐黃門トモ號ス。後ニ平相國ノ惡逆ニ依(リ)テ、尾張國ノ配所ニ赴キ、熱田ノ神前ニテ琵琶ヲ□□ル時、社壇鳴動シタルト、『平家物語』ニモ書(キ)載(セ)タル程ニ、□代ニモ、諸人執シタル達人ナリ。<sup>(同字)</sup>敕命ニ依(リ)テ、『三五要略』・『仁智要錄』編述セラレタルコト、豊原家ノ祕書『體源抄』ニ見ヘタリ。『三五要略』ハ、琵琶ノ家ノ祕書ナリ。『仁智要錄』ハ、箏ノ家ノ祕書ナリ。中原有安ガ『胡琴教錄』トイフ琵琶ノ祕書ニモ、妙音院殿ノコトハ、殊ニ尊有<sup>(ツレ有ル)</sup>之ナリ。書寫ノ年號「元亨元年」トアリ。元亨元年ノ書(キ)誤(リ)ナリ。元亨元年ハ、後醍醐帝ノ御代ナリ。當享保十二年ヨリ四百七年ナリ。<sup>(ママ筆カ)</sup>箏者平重政、并(ビ)ニ辰熊殿、未詳。
- 一 再書寫ノ年號、明應二年ハ、後土御門院ノ御宇、當享保十二年ヨリ二百三十六年ナリ。<sup>(ママ筆カ)</sup>箏者藤原葛光、未詳。

- 一 □書、琵琶ノ譜、六調子、<sup>(コマガク)</sup>伯樂、<sup>(セイアウク)</sup>清調マデ、<sup>(残ラズニ有リ)</sup>不殘有<sup>(フン)</sup>之、秦王・<sup>(デ)</sup>春鶯傳・<sup>(カウ)</sup>蘇合・<sup>(マンジユラク)</sup>萬秋樂等ノ大曲、<sup>(バチアワセ)</sup>撥合、<sup>(タクボク)</sup>殊ニ啄木・<sup>(リウセン)</sup>流泉等ノ祕曲モ有<sup>(ツレ有)</sup>之、<sup>(サイバ)</sup>催馬樂ノ譜モ廿五マデ有<sup>(ツレ有)</sup>之、堂上方琵琶ノ家ノ極祕書ニテ、最(モ)右ノ通り、作者モ正シキ書ナリ。惣ジテ、琵琶ノコトヲバ、御所作トイフ管絃ノ時分、天子ノ被遊<sup>(遊ハサル)</sup>コトナルユヘナリ。依<sup>(ツレ依リ)</sup>之、音樂ノ奧儀ハ、多ク琵琶ノ家ニ有<sup>(ツレ有)</sup>之ナリ。當時、堂上方ニテ催馬樂斷絶シタルコトモ、末ノ世ハ、堂上モ樂人モ、家ニ相(ヒ)分(カ)レ、我家ノ祕事ヲ、他家ヘハ堅ク知ラセザルユヘ、<sup>(エイキヨク)</sup>郢曲ノ家ニテ、琵琶ノ祕事ヲ<sup>(知ラズニ有リ)</sup>不知、是ニヨリテ、催馬樂モ斷絶□タリト見ヘタリ。此(ノ)書ニコレアル譜ニテ再興セバ、催馬樂モ再興、心安カルベキコトナルニ、末世ノ風俗、殘念ナルコトナリ。
- 一 右ノ外ニモ、當時、樂人ノ家ニ斷絶シタル譜モ多ク相(ヒ)見ヘ申(シ)候。

右之通之儀故、樂ノ書ニハ、至極結構成書ニ而御座候。但シ、本之様子得与吟味仕候處、琵琶不案内之者、寫シタル本ト相見ヘ、譜ノ文字相違多ク、拍子等落候處、付違候所モ多、朱書等ニモ誤有<sup>(ツレ有)</sup>之候。惣而、樂ノ書ハ、故實ヲ第一ニ仕候儀、習ニテ御座候故、元ヨリ誤候儀ヲバ、誤ナカラ其儘書認候事ニ御座候。サレ共、樂ノ書ハ、認様ニ子細有之物ニテ、外之推量ニ成不申事有<sup>(ツレ有)</sup>之候故、樂不案内之者、寫取候而者、本書之誤之上ニ、又アラタニ誤ヲ添申候事ニ



罷成候。

ヲッ<sup>ビ</sup>乙<sup>ニ</sup>上<sup>ジャウ</sup>ユ<sup>ク</sup>  
ゲ<sup>テウ</sup>下<sup>ジウ</sup>十<sup>セン</sup>ム<sup>レ</sup>レ<sup>ジャウ</sup>  
引<sup>ギヤウ</sup>リ<sup>ク</sup>コ<sup>ク</sup>マ<sup>マ</sup>々<sup>マ</sup>

桂 桂 時元特元

少輔<sup>(24)</sup>

## 【資料二二】

我國ノ樂ハ、周・漢ノ遺音ナリ。凡(ソ)樂ハ、律ヲ吹キテ調ヲサ  
ダメ、調ニヨリテ曲ヲ度シ、其(ノ)聲ヲ器ニカウフラシム故ニ、  
此(ノ)四ノ品ヲモテ、イヅレノ代ノ樂トサダムルニ、タガフ事ナ  
シ。先(ツ)、律ニモトヅキテイハバ、周・漢ヨリ六朝マデハ、律  
呂ノ聲アラタマラズ。尺度ヲハカリ、人ノ聲ニカウガヘ見レバ、  
周・漢ノ黃鐘ハ、吾國ノ黃鐘調ト其(ノ)名、又カハラズ。是ヲ徵  
トスル事ハ、琴絃ノ名ヲ、ツタヘタルナリ。笙・竽<sup>(25)</sup>栗ノ律ヲ、『文  
獻通考』・『稗編』ニシルセルニテ、ウタガヒナシ。隋・唐ヨリ後、  
吾國、異國ニシタガハザレバ、事實符合セルナリ。調ニヨリテイ  
ハバ、八十四調ノ樂ハ、唐ニハジマル。周・漢・六朝ミナ、五調  
ノ樂ナル事、書典ニ其(ノ)證有(リ)。宮・商・角・徵・羽ノ德ヲ  
イヘルモ、人、クチヲ開ケバ、五ツノ音備(ハ)ルナレバ、調ノ名  
ナル事、子細ナシ。曲ヲモテイハバ、安成・秋風・武德・王昭君、

萩生祖徠の音楽に関する新出資料五点とその意義について

漢ノ樂ナリ。唐・宋ノ樂曲ハ、後ニクハハタルナリ。器ハ、琴・  
笙・簫〔尺八〕ハ、漢ヨリ前、三代ノ物ナリ。箏・琵琶・胡笳〔竽  
栗〕・横笛ハ、漢ノ器ナリ。故(ニ)今、周・漢ノ遺音トサダムルナ  
リ。有(ル)人ノイハク、樂ハ和ヲ本トス。イヤシクモ、人ノ和ア  
ラバ、猿樂・築紫樂モ、ミナ樂ナリト。サレ共、今ハ古ニシカズ。  
古ヲ好ムハ、聖人ノ心ナリ。其(ノ)上、聲ヲモテイハバ、猿樂ハ  
躁(ガ)シ。築紫樂ハ哀淫ノ音ナリナド、管絃ノ洋ニ和雅ニ、シカ  
ムヤ。製ヲモテイハバ、管絃ハ、和・應・節奏、ミナ備ハル。和  
ハ、六八ノ和ナリ。應ハ、同律ノ應ズルナリ。節奏ハ、拍子ナリ。  
築紫樂ハ、應有(リ)テ和ナシ。猿樂ハ、和・應共ニナクテ、唯、  
節奏ノミナリ。節奏ハ法ナリ。應ハ情ナリ。和ハ道ナリ。法ヲ、  
ハゲシクシテ、國ヲ治メテ、情ヲ強ヒ、道ヲカヘリ見ザル事、室  
町家ヨリヲコリテ、猿樂出(デ)タルナルベシ。築紫樂ハ、人情ニ  
シタシクテ、道ナシ。六八ノ和ハ、異ヲ合(ハ)スル道ナレバ、天  
地ヲ動(カ)シ、鬼神ヲ感ゼシムルモ、管絃ノ德ナリ。故ニ、アル  
人ノ説ハ、樂ヲ用ユル道ヲ誤リテ、樂ヲ論ズルコトハリニアラズ。  
義家・正成、皆、絲竹ノ名手ナレバ、猿樂ハ武ノ樂ナリトイヘル  
モ、習俗ノ論ナリ。

○『文獻通考』載巢笙、十九管。比諸今笙多二管、而布律位置亦  
同。第一管應鐘、第二管黃鐘、第三管應鐘、第四管南呂、第五管  
蕤賓、第六管夷則、第七管大呂、第八管姑洗、第九管南呂、第十  
管黃鐘、第十一管蕤賓、第十二管姑洗、第十三管夾鐘、第十四管

太簇、第十五管林鐘、第十六管同上、第十七管太簇、第十八管舞射、第十九管中呂、是也。宋因唐舊。故『通考』（ママ文獻備考）所載爲唐制。唐

黃鐘爲今雙調。除第六・第十三管、則自餘十七管、莫不脗合。而

今笙「也」字號・「茂」字號無簧。求諸琵琶譜字號、「下」・「十」・

「美」・「乞」四者、隔六以求之、與笙律合。「七」・「比」・「言」・

「之」四者、隔八求之、亦與笙合。「八」・「卜」・「千」・「也」四者、

亦隔六求之、亦復與笙律合。而「卜」・「茂」國字相似。則「也」

字號爲雙調子、「茂」字號爲勝絕子。可以互證耳。今伶工家相傳、

以笙爲平調宮。由平調而往、四變以至神仙。由平調而來、四變以

至鳧鐘。故笙止有九律。亦與琴・笛布律法、皆宮在中者、合焉。

○琵琶安柱法

將本絃長〔謂覆<sup>覆</sup>■手搭絃際至臨岳際中間〕折作四段去一、是第四

柱處。將第四柱絃長、折作八段加一、是第二柱處。却將本絃長、

折作九段去一、是第一柱處。將第一柱絃長、折作九段去一、是第

三柱處。但柱皆雖絃一分或二分許、以便攏撚。故每柱皆退本處一

二分、手按絃貼柱。以中本律、則絃變急故也。

### 【資料二一三】

笙

〔宮居中〕〔爾雅〕

王穀「吹笙引」、「蝸皇遺音寄玉笙、變成傳得何淒清。丹穴嬌雛十

七隻、一時飛上秋天鳴。水泉迸瀉急相續、一束宮商裂寒玉。旖旎

香風繞指生、千聲妙盡神仙曲。曲終滿席悄無語、巫山冷碧愁雲雨。」〔『事文』續集廿三〕（ママ古今事類聚）

橫笛

李益「從軍北征」、「天山雪後海風寒、橫笛偏吹行路難。磧裏征人

三十萬、一時回首月中看。」

觱篥

白居易「小童薛陽陶吹——歌」（ママ樂集）、「剪削乾蘆插寒竹、九孔漏聲五音定」（ママ足力）

〔初學記〕十五、〔國語〕曰、「金尙羽、石尙角、竹尙商、絲尙宮、匏土尙徵。」

同十六箏、〔風俗通〕可考。

〔釋名〕曰、箏、施絃高、箏々然。」

同十六琵琶、

〔晉成公綏「琵琶賦」、「柄如翠蚪之仰首、盤似靈龜之背蟠。」

薛收「琵琶賦」、「其狀也、龜腹鳳頸、熊據龍旋、戴曲履直、破觚

成圓。虛心內受、勁質外宣、磅礴象地、穹崇法天。候八風而運軌、

感四氣而鳴絃、金華徘徊而月照、玉柱的歷以星懸。」

虞世南「琵琶賦」、「橫却月於天漢、寫廻風於洛浦」

唐太宗皇帝「詠琵琶詩」、「半月無雙影、金花有四時」

南齊王融「詠琵琶詩」、「抱月如可明、懷風殊復清」

梁徐勉「詠琵琶詩」、「含花已灼（約）、類月（ママ復圓團）團。」

陳叔達「聽隣人琵琶詩」、「關山臨却月、花蕊散廻風」

「白虎通」曰、「笙有七政之節焉、有六合之和焉。天下條之、故謂之笙。」

「晉王虞」<sup>(26)</sup>「笙賦」、「延脩頸以亢首、獻瑤口之陸離」

「笛音一定、諸絃歌皆從笛爲正。」

#### 【資料二一四】

承露〔俗曰岳裙〕<sup>〔岳前〕</sup> 鳳額<sup>〔琴首〕</sup> 鳳舌<sup>〔下〕</sup> 臨岳<sup>〔鳳軫足〕</sup> 軫杯<sup>〔琴項〕</sup> 鳳喙

龍腰〔一名玉女腰〕 龍齷〔琴末承絃之異名〕 冠角〔焦尾兩邊〕

龍鬚〔冠內兩綫〕<sup>〔聲池〕</sup> 龍池〔四後七前〕<sup>〔韻沼〕</sup> 鳳沼〔十後十三〕

軫池<sup>〔ウラ〕</sup>〔中山後十三山〕<sup>〔ママ岳カ〕</sup>

〔正〕 護軫〔兩角雁掌一名甲掌〕 鳳足<sup>〔九・十山處〕</sup> 鳳腿〔鳳足之下〕 絃眼

頸 肩 腰 鳳翅〔自肩至腰〕 冠綫〔焦尾上貼格〕 龍口

唇 龍沼〔卽鳳沼〕 琴槽 舌穴<sup>〔三・四山間〕</sup> 天柱<sup>〔七・八山間〕</sup> 地柱<sup>〔ママ八山處〕</sup>

兩池 槽腹 琴面 琴背 琴腹 絨扣<sup>〔ママ〕</sup> 絨對<sup>〔ママ〕</sup>

琴床〔琴案〕 氷絃 琴匣 替指 寶軫 玉軫

#### 【資料二一五】

日重光〔瑟調〕

雞鳴<sup>〔ママ八〕</sup>〔八〕<sup>〔ママ八七〕</sup>

喜春游<sup>〔ママ八〕</sup>〔八〕<sup>〔ママ八〕</sup> 春游曲〔長孫后〕

白紵<sup>〔ママ八〕</sup>〔八〕

回紵〔雜曲〕

幽蘭〔五首〕

折楊柳〔卷五擬漢 瑟調 西曲 月節〕<sup>(28)</sup>

玉樹後庭花〔吳聲〕

泛龍舟〔吳聲〕

輪臺歌〔岑參〕

大酺歌〔盧照隣〕

大酺樂〔張文收〕

張公子行〔常建〕

扶南曲〔王維〕

甘州詞〔失名〕

涼州詞〔王之渙〕

太平詞〔王維 新羅王〕

破陣樂詞〔張說〕

回波詞〔李景伯 沈佺期 又雜歌謠〕

山鷓鴣詞

火鳳詞

蘇摩遮〔張說〕

菩薩蠻〔李白〕

昇天行〔儲光羲〕

春鶯囀ノ咏

甘州ノ咏

五常樂ノ咏

採桑老ノ咏

卿雲

臨河

千金意〔卽桃葉〕

銅鞮

青驄

女兒子

朱明

大堤<sup>(2)</sup>

西河獅子  
酒泉子  
紅娘子  
一斗鹽

【資料二一六】

五秋●  
上●  
一●  
五●  
引●  
工●  
六●  
白●  
雲●  
飛●  
五●  
引●

五草●  
六●  
工●  
五●  
木●  
一●  
五●  
黃●  
落●  
一●  
四●  
兮●  
雁●  
南●  
歸●  
下●  
下●  
一●  
下●

四蘭●  
六●  
四●  
上●  
一●  
四●  
上●  
五●  
菊●  
工●  
五●  
有●  
芳●  
四●  
引●

六懷●  
工●  
五●  
一●  
五●  
人●  
兮●  
六●  
凡●  
六●  
四●  
六●  
不●  
能●  
忘●  
下●  
下●  
一●  
下●

五汎●  
上●  
一●  
五●  
引●  
樓●  
船●  
兮●  
工●  
工●  
六●  
四●  
濟●  
汾●  
河●  
五●  
引●

六橫●  
工●  
五●  
一●  
五●  
中●  
流●  
兮●  
六●  
凡●  
六●  
四●  
揚●  
素●  
波●  
下●  
下●  
一●  
下●

四簫●  
六●  
四●  
上●  
一●  
四●  
上●  
五●  
鼓●  
鳴●  
兮●  
工●  
發●  
權●  
歌●  
四●  
引●

六歡●  
工●  
五●  
一●  
五●  
樂●  
極●  
兮●  
六●  
凡●  
六●  
四●  
哀●  
情●  
多●  
下●  
下●  
一●  
下●

六少●  
工●  
五●  
一●  
五●  
壯●  
幾●  
時●  
兮●  
六●  
凡●  
六●  
奈●  
老●  
何●  
下●  
下●  
一●  
下●

右「古秋風樂」〔三十六拍〕

返●  
五上引 凡 三 山 兮 商 嶽 嵯 峨 天 降 凡 □ 三

老 兮 迎 我 來 歌 有 黃 龍 兮  
五上 四六 凡 六凡下舌下引 凡 凡 四 凡 五

自 出 于 河 負 書 圖 兮 透  
五上 上四 上四六引 凡 五 五 凡 五 上 四 六

迤 羅 沙 按 圖 觀 識 兮 閔 天  
凡 六凡下舌下引 一 四 六 四 凡 工 五 五 四 上

嗟 嗟 擊 石 拊 韶 兮 淪 幽 洞  
五上 四六引 凡 五 五 五 五 上 五 六 凡 六 凡

微 鳥 獸 踰 兮 鳳 凰 來  
下舌下引 上 五 凡 五 上 四 六 凡 六 凡

儀 凱 風 自 南 兮 唱  
下舌下引 凡 凡 六 四 上 一 四 引 六 四 六

其 增 嘆 兮 南 風 之 薰 兮 可 以  
凡 凡 五 上 五 五 上 五 凡 五 上 五 五 以

解 吾 民 之 慍 兮 南 風 之 時  
上 四 六 凡 六 凡 下舌下引 五 五 上 五 凡 五

兮 可 以 阜 吾 民 之 財 兮  
上 五 凡 五 上 四 六 凡 六 凡 下舌下引

### 右「古南風歌」〔四十二拍〕

共郭茂倩古譜載在鄭世子載堉「靈星小舞譜」中。

今以伶家聲栗譜字寫填。

それでは、以下に、【資料二一】～【資料二一六】の内容と意義について述べてみたい。

【資料二一】は、日本の雅楽の琵琶譜集成、藤原師長（一一三八～一一九二）撰『三五要録』の略抄本である『三五要略』の一伝本について、その書誌や資料的価値などを述べたものである。本文中に「當享保十二年」と見え、末尾に「本之様子得与吟味仕候處」と述べることから、徂徠が『三五要略』の吟味を行い、享保十二年に執筆した報告書のようなものであると推測できる。また、この【資料二一】には、吟味した『三五要略』の写本の書誌だけでなく、琵琶の譜字や曲目についても述べられており、徂徠がこの分野においても詳しくあったことが、窺い知れる。

なお、享保十二年、そして琵琶譜と言えば、徂徠が同じ年の六月に、幕命にて『三五中略』校正を行ったという出来事が想起されようが、この御用と、『三五要略』吟味との関連性については未詳である。今後、【資料二一】に述べる書誌情報から、徂徠が吟味した『三五要略』の伝本を特定し、且つ本稿第四章に取り上げる【資料四】（享保十二年五月執筆の吉水院旧蔵楽書に関する文書）を併せて参照することで、『三五中略』校正御用の実態と、それに関連する徂徠の事跡について、調査を進めたい。

【資料二一二】の冒頭に述べる「我國ノ樂ハ、周・漢ノ遺音ナ



り。」とは、『楽律考』、『楽制篇』、及び『琴学大意抄』などに論じられる但徠楽論の根幹をなす主張であり、但徠の楽理研究における自説の要である。「律ニモトゾキテイハバ」(四行目) 以下は、『楽律考』に論じる見解を簡略に述べたような内容となっており、「調ニヨリテイハバ」(九行目) 以下は、『楽制篇』に論じる内容に通ずる<sup>31)</sup>。また「曲ヲモテイハバ」(二三行目) 以下も、詳細については省略するが、他の著述(『楽曲考』『琴学大意抄』『但徠集』収載の書簡など) にも見られる但徠の楽論を、簡潔に述べたような内容となっている。

一方、『資料二一三』の「○『文献通考』」以下の漢文体の部分においては、まず、宋・元の馬端臨撰『文献通考』卷一三八「楽考」(に引く陳陽撰『楽書』) に載せる巢笙の音律と、日本の雅楽の管絃に用いられる笙の音律を、唐代と日本の音律の基準音の差異を考慮に入れた上で分析すると、両者が符合する、という見解が述べられている。注目したいのは、この記述部分が、『楽律考』の第八証に簡略に述べる内容<sup>32)</sup>を、詳しく説明したようなものとなっていることである。『楽律考』第八証を理解する上で、貴重な記述と思われる。ちなみに、この笙の音律に関する分析は、但徠の楽理研究における重要な見解の一つであったようである。というのも、北溪が將軍吉宗に献上した「荻生考」(『名家叢書』第六二冊) 収載「楽律ノ考」においては、この分析・見解を取り上げて、図を用いて詳しく説明し、「右ノ通り荻生惣右衛門ガ考(へ)置クナ

り」と述べているからである<sup>33)</sup>。

また、当該「○『文献通考』」以下の部分には、ほかにも、笙と琵琶の譜字と音律の関係性についても述べており、「○琵琶安柱法」以下では、琵琶の柱の位置と実際に指で押さえる位置について言及されている。但徠が日本雅楽の笙・琵琶に関して、文献と楽器を用いた専門的な楽理研究を行っていたことが知られよう。

【資料二一三】は、宋の祝穆編『古今事文類聚』続集卷二三「笙」、及び唐の徐堅等編『初学記』卷一五「雅楽」、卷一六「箏」「琵琶」からの抜書きとみられる。出典を記していない箇所も、『古今事文類聚』続集卷二三「笛(簫栗)」、及び『初学記』卷一六「笙」「笛」からの抜書きであろう。日本の雅楽(唐楽)にて伝承され、管絃に用いられている笙・横笛・簫栗(簫簞)・箏・琵琶の淵源を考究するために、中国の古文献から、楽器の形状や楽律が窺い知れる記述を拾い、書き留めたものと思われる。

【資料二一四】は、琴<sup>きん</sup>(詳しくは本稿第三章に述べる) の各部位の名称を書き留めたものである。但徠の琴<sup>きん</sup>の専著である『琴学大意抄』の「琴ノ名所ノ事」の章を著すための、草稿や覚書であったのかもしれない。

【資料二一五】は、楽府題や詞曲名を挙げている。中国古代の歌謡について考究するための覚え書きであろうか。日本雅楽に伝わる唐楽曲の曲名も挙げており、それらには「ノ咏」と附している点が目される。

【資料二一六】には、「古秋風楽」と「古南風歌」と題する楽譜が記載されている。これらは、末尾二行に述べるように、鄭世子（朱載堉）の「靈星小舞譜」に収載する字舞譜「古秋風辞譜章」と「古南風歌譜章」の工尺譜を、日本雅楽の聲栗（筆筭）譜に換えたものである。「靈星小舞譜」は、享保十年に、徂徠が幕府から校閲を命ぜられた朱載堉撰『楽律全書』に収載するもので、朱載堉は本書の中で、「古秋風辞譜章」と「古南風歌譜章」について、「<sup>臣</sup>謹按、『樂府詩集』云、「古南風歌」舜所作也。「古秋風辞」漢武帝所作也。二者竝見南監舊板『樂府詩集」、即郭茂倩氏手編古本也。」と述べている。

この【資料二一六】に記す譜の改編方法に関しては、「靈星小舞譜」の譜字と照合したところ、大方は、左の表に示す対応関係により、工尺譜を聲栗譜字に置き換えたとみられる（ただし、この対応関係に合わない譜字も幾つか見られる。誤写か否か判断できないため、右の翻刻においては、全て底本の譜字のままとした）。また、「古秋風楽」の譜においては、各句末の音価を伸ばすなど、拍子の点も変えている。さらに、「靈星小舞譜」では「古秋風辞譜章」とあるのを、「古秋風楽」に変えているのは、何か意図があったことだろうか。<sup>(35)</sup>

【資料二一六】の聲栗譜字	舌	下	工	凡	六	四	一	上	五
朱載堉「靈星小舞譜」の工尺譜字	合	四	一	上	尺	工	凡	六	五

荻生徂徠の音楽に関する新出資料五点とその意義について

【資料二一六】の譜は、徂徠が礼楽の実践、ないし古楽の復元に向けて行った試みの一つであったのだろうか。徂徠あるいは徂徠の周辺で行われた音楽研究と実践において、知られざる一面が、この資料によって浮かび上がったとも言えよう。

### 三、琴（七絃琴）に関する文書——【資料三】

【資料三】、及び本稿第四章に取り上げる【資料四】は、共に、荻生家所蔵の一綴りの稿本（版心下部に「徂來山房」と刻した用紙に書写した雑稿を一綴りにしたもの）に収載されている文書である。この荻生家所蔵本そのものは、筆者は未見であり、丸山眞男文庫所蔵荻生家文書の写真複製版「学寮了簡、周尺の<sup>マヤノゴト</sup>了等、和歌等」「登録番号〇一九七二七八」を閲覧した。ここに、写真複製版によって確認できた書誌事項と、その他の情報を報告すると、次のとおりである。

- (一) 表紙は無題。ただし、写真複製版の表紙には、丸山眞男氏が「徂徠先生著書（徂徠山房稿）」と書き入れている。
- (二) 一丁表・裏に、後人による目録が、以下のように記載されている（二箇所省略する）。<sup>(36)</sup>

#### 目次

- 一、答問書
  - 二、周尺ノコト
  - 三、度量衡三器私考
- 十、唐番俗語

〈省略〉

- 八、五絃琴譜 幽蘭譜碣石調
- 九、書美稻樂書後

〈省略〉

- 十二、和歌 貳拾首異同壹首
- 十三、徂徠先生ノ和歌（福井久藏著）

なお、この目次には遺漏があるようで、写真複製版には、「学寮了簡」「三星之事」と、丸山氏の書き入れがある。

- (三) 当該荻生家本に収載する「和歌」と「学寮了簡」については、丸山眞男「『太平策』考」七九四、七九九頁に紹介がある。

さて、本稿本章で紹介する【資料三】は、右の目次に「八、五絃琴譜 幽蘭譜碣石調」と記すものに当たる。次章に紹介する【資料四】は、「九、書美稻樂書後」に当たるものである。

ところで、【資料三】【資料四】の文書は、共に、白杵市立白杵図書館所蔵『徂徠先生手沢集』にも書写、収載されており、筆者はこれまでに、『徂徠先生手沢集』に見える当該文書の一部を、拙著等にて引用したことがあった。<sup>38</sup> 今回、これと同一の文書が、荻生家所蔵の「徂來山房」用紙からなる稿本中に収載されていることが確認できたことで、『徂徠先生手沢集』に見える当該文書の信頼性も、裏付けられたとみてよいだろう。

それでは、以下、荻生家文書写真複製版から、【資料三】の全文

を翻刻する。

【資料三】<sup>39</sup>

一 『五絃琴譜』、近衛太閤御所持之由、先年、伯耆殿御物語二候。其外、琴譜御所持之衆、堂上方ニ可有之候。先年、伯耆殿ヨリ被遣候『琴用指法』ニ有之候。梵字之様成文字ニテ認有之候ハ、琴譜与者相見へ申間敷候。一往只琴譜与計御尋候ハ、持主モ存當リ有間敷候。且又、近來明朝ヨリ渡リ候琴譜ハ、用ニ立不申候。吾國ニ古來ヨリ傳リ有之候琴譜之事ニテ御座候。

一 『幽蘭』ノ譜ニ、碣石調ト有之候。乞食調之事ニテ御座候。乞食調之笙譜共考申度存候。且又、乞食調ノ調へ、如何仕候哉。琵琶・箏坏之方ニ相傳御座候哉。承度存候。

一 琴ノ形、明朝ヨリ渡リ候者、先比懸御目候通りニ候。若吾朝古來取用候琴、南都坏ニ納有之候哉。圖見申度存候。第一、其長短ニテ、律モ究リ可申候。絃ヲ通シ候穴之大小ニテ、絃ノフトサホソサモ、相知可申候。且又、徽之配リ、明朝之通りニ御座候哉。是又、律ニカ、リ候事ニテ御座候。委敷僉議申度事ニ御座候。

【資料三】に記す「琴」とは、冒頭の『五絃琴譜』を除き、全て、七絃の琴（俗称「七絃琴」）、今日では一般的に「古琴」と呼ば

れる)のことを言う。この琴きんとは、中国紀元前に起源し、古来、儒者に尊重且つ愛好され、日本にも奈良時代には伝来したと知られる楽器である(以下「琴」と表記するものは全て、この琴きん(七絃琴・古琴)のことを指す)。

さて、琴といえど、徂徠は、当時、楽人の辻(本姓は伯)近寛(一六六六―一七二〇)が所蔵していた琴の古楽譜『幽蘭』(『碣石調幽蘭第五』)と古指法書『琴用指法』の価値を見出し、解説から『幽蘭』復元研究まで行い、『幽蘭譜抄』、『琴学大意抄』等を著した<sup>(40)</sup>。【資料三】の第一条は、「伯耆殿」(辻近寛のこと)所蔵の『琴用指法』に記載された梵字のような文字が、すでに失伝した琴の古い譜字であると見出したことを、報告しているのであろう。なお、冒頭の『五絃琴譜』は、近衛家に伝わり、現在陽明文庫所蔵の、およそ平安中期に失伝したとされる五絃琵琶の楽譜集成のことである。

徂徠は、『幽蘭』を解説・復元研究する際、『幽蘭』の曲名に冠する「碣石調」が、日本雅楽の唐楽に伝わる「乞食調」であるとみなし、且つ古楽の調に関する自身の見解に基づいて、その調絃法を解釈、推定したことが、『幽蘭譜抄』、『琴学大意抄』等から知られる<sup>(41)</sup>。【資料三】の第二条は、この碣石調の調絃の問題に関して、笙の譜、さらには琵琶や箏などをつかさどる楽家の伝から、乞食調の詳細を知りたいと述べているものであろう。

【資料三】の第三条の内容は、次のとおりであろう。意識する

と、すなわち、南都(奈良)などに現存する琴の古楽器の図が見たい。図があれば、琴の全長と絃を通す穴の太さを調べ、古の絃の長さ太さを推測し、また琴面に埋め込まれた十三個の「徽」(指で絃を押さえる箇所を示す印)の配置が、現行の明朝の琴と同じであるかどうか調べ、古楽の楽律を明らかにできるのでないか。詳しく僉議したい。というような旨が述べられている<sup>(42)</sup>。

以上、【資料三】の文書からは、徂徠が、日本に伝存する琴の古楽譜と古指法書、及び日本に伝承されている雅楽(唐楽)の調、さらには日本に伝存する琴の古楽器に着目し、文献・伝承・楽器という多方面から、実証的に古楽を考究していた(あるいは考究を試みていた)ことが明らかである。

最後に附言すると、この【資料三】は、文体からして、書付や書簡の類とみられるが、これが誰に宛てて出されたものか知りたところである。それがわかれば、徂徠の琴と古楽をめぐる研究の背景が、より明らかになると思われる。

#### 四、吉水院旧蔵楽書に関する文書——【資料四】

ここに紹介する【資料四】の書誌については、前の第三章にて述べたとおりである。以下、荻生家文書写真複製版から、【資料四】の文書全文を翻刻する。

【資料四】<sup>(43)</sup>

書美稲樂書後

此(ノ)二冊ハ、南朝ノ遺書ナリトテ、美稻ノ吉水院ニ藏(シ)タリシヲ、點檢ナサシメ給フ、次ニ、ミソカニ寫(シ)取(リ)ヌ。二冊一部之書ニアラズ。下卷ニ記シタル事ハ、上卷ノ奥書ノ年號ヨリハ後ノ事共ナリ。衣魚サエ腐(リ)爛レテ、文字ミエワカヌ所々ヲ、心ノ行(ク)ママニ、。墨モテ補(ヒ)ヌ。違ヘル事モ有(ル)ベシ。

享保十二年五月盡

茂卿

【資料四】は、末尾に日付と署名が見え、徂徠が享保十二年五月末日に著したものと認められる。「美稻」(吉野)の吉水院に藏されていたという樂書二冊の調査の際、徂徠がそれらを取写し、藍筆で、欠損箇所を文字を補ったらしきことが知られる。筆者は、現時点で、【資料四】に述べる樂書が何であったのか、特定できていないが、同年の享保十二年六月に行ったという『三五中略』校正御用<sup>(46)</sup>、及び前掲【資料二一】の「三五要略考」(推定享保十二年執筆)に述べる『三五要略』の吟味に関連するものであろうか。いずれにしても、本資料は、徂徠が古樂書に対して行った事跡の一端が知られるものである。

五、中根元圭に宛てた書簡四通の写し

——【資料五—一】——【資料五—四】

最後に紹介するのは、このたび図らずも、関西大学図書館泊園文庫所蔵の藤澤東暎自筆稿本から見出した、徂徠の中根元圭に宛てた書簡四通の写しである。

先に元圭について述べておくと、周知のとおり、中根元圭(元珪とも。本姓は平、名は璋、通称は上右衛門あるいは丈右衛門、一六六二—一七三三)は、算学・暦学・天文・度量衡等の研究で知られ、享保十二—十三年には、幕臣で暦算家の建部賢弘の推挙により、將軍吉宗の命による梅文鼎撰『暦算全書』の翻訳作業に従事し、また、日本で初めて十二平均律の数値を計算した人物でもある<sup>(47)</sup>。元圭は、徂徠の『度量考』を校閲し、徂徠は、元圭の著作『皇和通曆』に序を記し、元圭の『荀子』出版計画に際して跋を著すなど、二人の間に交流ないし接点があったことは知られるが、それがいつから始まったのかなど、詳細については不明とされている<sup>(48)</sup>。

藤澤東暎(一七九四—一八六四)は、周知のとおり、徂徠学を中興した人物である。泊園文庫には、彼の自筆稿本が多く残されており、そのうちの一冊である『(東暎文稿)』第八冊「手録」〔請求記号 LH2\* 田\*\*10〕には、二四丁表から三三丁表にわたって、四通の書簡が書写されている。これら書簡四通の写しについては、



これまで、泊園文庫の目録に取り上げられてはいないが、筆者がそれらを一覽したところ、四通とも、徂徠が、將軍吉宗から朱載堉撰『楽律全書』の校閲を命ぜられた時期に、元圭に宛てて書いた書簡の写しであるとの判断に至った。その判断の根拠を幾つか挙げると、次の(一)～(四)のとおりである。なお便宜上、以下、四通を、書写されている順に、【資料五―一】～【資料五―四】と分類する。<sup>33)</sup>

(一) 【資料五―一】は、末尾に「荻生惣右衛門 茂卿」「中根上右衛門様」と見え、【資料五―二】は、末尾に「茂卿」「中根上右衛門様」と見え、【資料五―三】は、末尾に「物部茂卿」「中根上右衛門様」と見え、【資料五―四】は、末尾に「物部茂卿」「中根上右衛門様」と見える。周知の如く、惣右衛門は徂徠の通称、茂卿は徂徠の字である。上右衛門は元圭の通称であり、徂徠は他の著述においても、元圭を上右衛門と記すのが確認できる。<sup>34)</sup>

(二) 【資料五―一】(日付は「八月十五日」と記す)には、「此間、長崎へ参候清人朱來章ト申者獻候由にて、明萬曆年中、鄭恭王世子朱載堉編述之書十五部、吟味被仰付」とあり、朱載堉撰『楽律全書』校閲御用のことを言っているのは明らかである。荻生家先祖書(由緒書)に、「七月八日清人朱來章獻上之御書物鄭世子朱載堉樂書校閲御用被仰付」と記すとおりである。<sup>35)</sup>

荻生徂徠の音楽に関する新出資料五点とその意義について

(三) 先の(二)により、【資料五―一】の執筆年は、『楽律全書』校閲御用の享保十年と推定されるが、この書簡の冒頭には、「愚拙無事罷有候。小屋懸も出来、六月廿七日舊宅へ移申候乍」と見える。平石直昭氏の『荻生徂徠年譜考』によると、この年二月に徂徠宅は火事に遭い、徂徠は他所での寄寓を経た上で、七月までには新築となった旧宅に帰ったという。<sup>36)</sup>この出来事と右の文面は符合することから、確かに徂徠の書いた書簡と認められる。

(四) 徂徠が元圭のために、『皇和通曆』の序文と『荀子』の跋文を撰じたことは、前に述べたとおりである。【資料五―一】には「御書物吟味手間取、いまた御頼之序も、不認候。」とあり、【資料五―二】には、「通曆序・荀子序、認進申候。」と見える。徂徠が元圭に頼まれた『皇和通曆』の序文と『荀子』の跋文の進捗状況について述べているものとみられ――ただし荀子の方は跋ではなく序になっているが――、この点においても、徂徠が元圭に宛てた書簡とみて、矛盾はない。

以上のことから、本資料は、徂徠の中根元圭に宛てた書簡の写しとみて問題なからうが、これらを、東畝が何から写し取ったのか、その祖本ないし原本については不明である。また、同様の写しが他に存するか否かも未詳であるが、管見では、これまでに知られていない貴重な資料であると判断し、本稿で紹介する次第である。ただし、四通全文を紹介すると、本稿での論題(徂徠の音

樂) から外れてしまい、また、資料自体の量も多いため、本稿では、ひとまず全文の写真を巻末に掲載し、『楽律全書』校閲と音律に関する箇所を、部分的に取り上げて翻刻する(省略箇所は「(省略)」と表記する)。今後、稿を改めて、全文を翻刻・紹介したい。

## 【資料五一】

### 〈省略〉

一 此間、長崎へ参候清人朱來章ト申者獻候由にて、明萬曆年中、鄭恭王世子朱載堉編述之書十五部、吟味被仰付、致一覽候。此三部ハ、聖壽萬年曆・同備考・律曆通記にて候。授時曆・大統曆誤有之候由、別ニ曆法組立申候。大統曆ハ、私習天文之律條、曆法藏于官府有之候故、載堉、終二一見不申也。見行之曆を以而、推知候由ニ候。其外、舞樂學書七、八部・律呂精義内外篇・樂經古文・律学新説・樂學新説・算學新説、合テ十五部ナリ。律呂精義之内、十二律ノ算法有之、大形、足下之説ト同様存候。但半律音濁ハ、空圍之度不得法故也トテ、三分損益ヲ廢シテ、別ニ算法ヲ立候。空圍ノ度も、自然之度有之由ニ候。此段、足下異ニ候。此外ニ圓算之事有之候。祖冲之カ密率ハ、非密率也。約率也。別ニ密率アリ。『周髀算經』・『周禮』東人ニ有之。千古之人發明不得候を、元儒李治これを會得して、『測圓海鏡』之序中ニ書候。人ニ不存事故、詳ニ説由有之候。曆學・數學ハ、拙者不案内ニ候へ共、書面

之通、如右ニ御座候。曆學・數學達者ニ仰付候ハ、御調法ニも可能成候由、申上候。其次ニ、足下之御尊をも申候。中二届申間數ト存候。右之御書物吟味手間取、いまた御頼之序も、不認候。右之十二律と圓法と御嗜好之事ニ候故、粗増別紙懸御目候。以上。

八月十五日

荻生惣右衛門

茂卿

中根上右衛門様

## 【資料五二三】

### 〈省略〉

算学之事ハ、愚拙不案内ニ候へ共、〈省略〉御了簡とくと可被仰下候。

### 〈省略〉

足下先年被仰候律算之事ハ、管圍之説ヲ廢スル故、半律にてハ、<sup>(管)</sup>メル事ニ候。朱載堉モ其段委細ニ辨申候。管圍と管之長サ相應ニスルトキハ、半律も<sup>(管)</sup>正律ト同シト申候。管圍ノ率ヲ知サルユへ、半律にて<sup>(管)</sup>メルト云コトヲ説申候。扱、其律管ノ長サ相應ニ管圍ヲスルト云カ不合ハ、圓中容方、方中容圓、又其圓中ニ方ヲ容レテハ、又〈省略〉。是、朱載堉カ書面之趣、如此候。然レトモ、算法之事ハ、拙者不案内ニ候故、強而論不申候。且又、律圍ヲ廢スル説ハ、愚拙不同心ニ

て、絃ヲ以テ論スルトキハ、長短ニ隨て、律ノ替リアレトモ、簧ノ厚薄大小ニ隨て替アリ。此理ヲ以テ見ルトキハ、決定シテ律管ノ長短、相應ノ管圍アルヘキコトト存候。右、足下思召ヲとくと承置、上ヘノ御挨拶致候。〈省略〉

#### 【資料五―四】

〈省略〉

一 十二律算文理御合点參兼候由、愚拙委敷寫留置、追而力、セ候而、可懸御目候。御慰ニ御覽可被成候。管圍を廢スル事、先年、足下も御物語候故、辻伯耆守ニ、愚拙承合セ候所、彼男ニハンナル挨拶ニ候。耳ハ師曠ニハ劣ル哉と此疑モ有之候。

〈省略〉

以上、【資料五―一】の書簡から知られるのは、徂徠が、『樂律全書』の吟味を仰せ付けられたことと、『樂律全書』の内容について、事細かに元圭に報告していることである。なお、『樂律全書』所収「律呂精義」には、朱載堉が発明した十二平均律の数値とその計算方法が記載される<sup>(57)</sup>。元圭もまた、この時点（享保十年）より三十年ほど前に、「律呂精義」は未見のまま、独自に十二平均律を算出し、『律原發揮』（元禄五年（一六九二）刊行）に発表したことが知られるが、この書簡からは、徂徠がすでに元圭の十二平均律を知っていたことが、明らかである。徂徠は、元圭に、「律呂

精義之内、十二律ノ算法有之、大形、足下之説ト同様存候。但半律音濁ハ、……。此段、足下異ニ候。」と述べ、朱載堉と元圭の方法の違いを報告し、さらに、「右之十二律と圓法と御嗜好之事ニ候故、粗増別紙懸御目候。」と述べている。徂徠自身は、「曆學・數學ハ、拙者不案内」であつたため、元圭に教示を求めたのではなからうか。徂徠と元圭が、樂律をめぐつて、親しく書簡を交わしていたことが、注目されよう。

次の【資料五―三】は、古来、「黃鐘」律管の長さ九寸、圓九分とされる、「圓九分」の解釈と管口補正などに関して述べているものとみられる。「圓九分」については、これを管内の周囲の長さとする説と、空圍（断面積）とする説があるが、この書簡で「足下先年被仰候律算之事ハ、管圍之説ヲ廢スル故」と言っているのは、元圭が先に『律原發揮』の「黃鐘實積算法」の節などで、空圍の説について論じたことを指しているのであらうか。<sup>(58)</sup>「朱載堉モ其段委細ニ辨申候。」以下は、『樂律全書』で朱載堉が論じ計算する管口補正や円周率のことを、元圭に報告し、見解を求めているものと窺えよう。なお、徂徠は、「算法之事ハ、拙者不案内ニ候故」と言いながらも、「愚拙不同心ニて」と、自分の見解もしっかり述べていることも注目される。

【資料五―四】では、「十二律算文理御合点參兼」というのが具体的に何を言うのか不詳ではあるが、「愚拙委敷寫留置、追而力、セ候而、可懸御目候。御慰ニ御覽可被成候。」とあるように、徂徠

と元圭が、楽律の問題を詳しく議論していたらしきことが知られるよう。また、ここに言及されている「辻伯耆守」とは、本稿第三章に述べたとおり、『幽蘭』と『琴用指法』を所蔵し、これらを徂徠に見せた楽家の辻近寛のことである。ちなみに、遠藤徹氏によると、元圭は『律原發揮』を著す前に、すでに辻伯耆守と、日本の音律学を取り立てるべく、京都の公家の鷲尾隆尹に働き掛けていたという<sup>①</sup>。

先述したように、これまで徂徠と元圭の交友の実態は知られておらず、享保十年の『楽律全書』校閲御用に関しても、「徂徠の校閲作業に中根元珪の知識がどこまで影響したかは不明である」とされる。しかしながら、右に翻刻・紹介した書簡からは、徂徠が『楽律全書』校閲前から、すでに元圭との親密な交流があり、校閲に際しては元圭に報告し、教示を求め、頻繁な書簡のやり取りをしていたことが明らかになった。また、徂徠は、十二平均律計算法を含む元圭の音律に関する説についても、すでに知っていたとみられ、二人が議論を交わしていたであろうことも、書簡から認められた。今後は、【資料五―一】と【資料五―四】全文から、徂徠と元圭の音律に関する議論の詳細、『楽律全書』校閲における論点、校閲の仕事の実態、そして元圭の『暦算全書』翻訳御用に至るまでの経緯などについても、闡明できれば幸いである。

## 注

## (1)

なお、『楽律考』『楽制篇』『楽曲考』を含む統合名は「大楽發揮」とされることから（拙稿「荻生徂徠著『楽律考』の執筆時期——『大楽發揮』五篇と楽書十卷（逸書）の関係性に着目して」（『國學院大學北海道短期大学部紀要』第三四巻、二〇一七年）一五頁参照）、これらの伝本には別名を「大楽發揮」とするものもある。『楽律考』『楽制篇』『琴学大意抄』については、拙稿「荻生徂徠の楽律研究——主に『楽律考』『楽制篇』『琴学大意抄』をめぐる」（『東洋音楽研究』第八〇号、二〇一五年）、及び未完ではあるが「荻生徂徠著『楽律考』訳注稿（一）」「同（四）」、「荻生徂徠著『琴学大意抄』（荻生家所蔵、徂徠自筆稿本）注釈稿（一）」（『國學院大學北海道短期大学部紀要』第三〇―三四巻、二〇一三―二〇一七年）等に、『幽蘭譜抄』及び関連する諸写本（徂徠編著『幽蘭譜 附琴左右手法・琴手法図・調琴法、物観（荻生北溪）校正『幽蘭譜』については、拙著『国宝「碓石調幽蘭第五」の研究』（二〇一二年、北海道大学出版会）「荻生徂徠による『幽蘭』研究の実態」（附録三）に詳しい。なお、『琴学大意抄』と『幽蘭譜抄』は荻生家に徂徠自筆稿本が現存する。『楽曲考』については、管見では、これを特に取り上げた先行研究は思い当たらないが、その伝本（写本）は、早稲田大学図書館服部文庫や国立公文書館内閣文庫等に存する。

## (2)

荻生家先祖書（由緒書）に「有徳院様御代享保……同十一年七月八日清人朱來章献上之御書物鄭世子朱載堉樂書校閲御用被 仰付有馬兵庫頭被申渡相勤申候……同十二年六月六日三三中略校正御用被 仰付旨有馬兵庫頭被申渡相勤申候」（大庭脩編著『享保時代の日中関係資料三八荻生北溪集Ⅴ』（関西大学東西学術研究所資料集刊九一四、一九九五年、関西大学東西学術研究所）五四〇頁）とある。なお、ここに見える「樂書」とは、現在、国立公文書館内閣文庫所蔵「経書」の朱載堉撰『楽律全書』（明万曆三十一年刊本、紅葉山文庫旧蔵）であることが、陶徳民氏の「荻生徂徠の『楽書』校閲とその所産」（『日本漢学思想史論考——徂徠・仲基および近代』（関西大学東西学術研究所研

究叢刊十一、一九九九年、関西大学出版部。初出は『待兼山論叢（史学篇）』第二号、一九八七年）四九～五七頁、及び大庭脩氏の研究（『享保時代の日中関係資料三八萩生北溪集』）三二～三三頁など）によって明らかにされている。「三五中略」については後述。

(3) 今日の音楽用語では一般的に、音高を表す音律と調の規定を含めて「楽律」と言うことが多い。ただし、徂徠は音律のみを指す場合も「楽律」と言うことから（『楽律考』等参照）、本稿では、「音律」と「楽律」の用語の使い分けを厳密には行わないこととする。

(4) 写真複製版から確認した限りでは、この【資料一―】【資料一―二】を含む写本全体の体裁などはわからないが、この【資料一―二】の前には、「周尺」と題し「一、周尺ノコト三説アリ」で始まる文書（紙数八丁）が、同筆にて書き写されているのが認められる。この「周尺」と題する文書について補足しておくと、同じ文書が、荻生家所蔵の、版心に「徂來山房」と刻した用紙に書かれた稿本（本稿第三章参照）中にも見える。また、徂徠の弟、荻生北溪（後述）が將軍吉宗に提出した「荻生考」にも、「周尺ノ考」と題する同文書が記載されている（国立公文書館内閣文庫所蔵『名家叢書』「特選」）第六二冊「荻生考」収載。ただし、「周尺ノ考」は末尾に、「隋書」卷二六「律曆志上」「審度」、「通典」卷一四四「樂四」「權量」等から、参照すべき記述を引用して附載している。

(5) 『荻生徂徠』（日本思想大系三六、一九七三年、岩波書店）八二〇頁。また同八一七頁に、「有馬らと徂徠との交通が享保の代のそもそものはじめからあったかどうかは不確かであり、それが確認されるのは、享保五年ごろであり」とも述べておられるが、その根拠となる資料は、やはり示されていない。

(6) 平石直昭『荻生徂徠年譜考』（一九八四年、平凡社）や田尻祐一郎『荻生徂徠』（叢書・日本の思想家一五、二〇〇八年、明徳出版社）には取り上げられていない。印藤和寛氏の一連の論考「富永仲基『三器』度考の復原——『楽律考』の一考察」（『懷徳』第六二号、一九九四年）

二九頁、『富永仲基の「楽律考」——儒教と音楽について』（二〇〇六年、朔北社）二二八頁などには引用されているが、その典拠は闡明されていない。

(7) 【資料一―】【資料一―二】の翻刻においては、句読点と並列点を加え、漢字は原則として正字に統一し、漢字の反復記号は「々」に改めた。仮名の変体・略体・合字等は通行の字体に、仮名の反復記号は該当する文字に改め、仮名の濁点を補い、送り仮名の不足を（）内に補った。また、書名には「』」を、他文献からの引用の箇所には「」を加えた。代字、通用字、及び省略や誤記と思しき箇所には、右脇に〈ママ〉と記した。

(8) 「歴」は「曆」に通用するため、「律歴」は「律曆」に改めず、底本のままとした。なお、清の乾隆帝の諱（弘曆）を避けて「歴」とする例もあるが、執筆年からすると、避諱による代字ではないと思われるが、どうであろうか。

(9) 『魏書』には「元匡」に作る。徂徠が見た資料（宋代のものか）では、宋の太祖趙匡胤の諱を避けて「元匡」の「匡」を「正」としたのであろう。

(10) 荻生家先祖書（由緒書）に「有徳院様御代享保六年九月十五日戸田山城守殿六諭衍義一冊御渡被成訓點を附可奉差上之旨……同七年寅年二月廿九日於 御城御書籍御用被 仰付相動候……又引續御隱密御用被仰付有馬兵庫頭宅<sup>五</sup>毎月三度宛罷出候……」（大庭脩編著『享保時代の日中関係資料三八萩生北溪集』）五四〇頁とあり、「有徳院殿御実紀」卷一三の享保六年九月十五日の条に「松平甲斐守吉里が儒臣荻生惣右衛門茂卿<sup>五</sup>をめし。六諭衍義の譯を命ぜらる。」と、同七年二月二十九日の条に「この後も茂卿しばしば御尋問のことどもありて。月毎に御側有馬兵庫頭氏倫が家にまかり」（『徳川実紀』第八篇（新訂増補国史大系、一九七六年、吉川弘文館）二四七、二六三頁）とある。

(11) 辻達也『享保改革と徂徠学派』（日本思想大系月報）二二、一九七二年、岩波書店）三頁、吉川幸次郎『徂徠学案』（『荻生徂徠』日本思



想大系三六、一九七三年、岩波書店）七三七頁など。

- (12) 荻生家先祖書（由緒書）に「有徳院様御代享保……同十四<sup>酉</sup>年二月廿日茂卿著述之度量考差上候様 仰出之旨大嶋雲平を以觀<sup>江</sup>被仰渡同四月朔日度量考二本獻上仕候……同二十<sup>卯</sup>年十月十七日茂卿著述之樂律考差上候様大嶋近江守觀<sup>江</sup>被申渡同廿三日樂律考獻上仕候」（大庭脩編著『享保時代の日中関係資料三ハ荻生北溪集』五四〇～五四一頁）と、「有徳院殿御実紀」巻二九の享保十四年四月朔日の条に「松平甲斐守吉里が家士荻生惣右衛門道濟。亡父惣右衛門茂卿が遺書度量考奉る。」と、同巻四二の享保二十年十一月十七日の条に「松平甲斐守吉里が家人荻生惣右衛門道濟に。父茂卿が遺書猶あらば奉るべきよし仰ありしにより。樂律考を獻す。」（『徳川実紀』第八篇、四九七、七〇三頁）とある。なお『度量考』は、その後、校訂を経て、且つ北溪著「衡考」を加え、享保十九年に『度量衡考』として官刻された。
- (13) 国立公文書館内閣文庫所蔵「名家叢書 第六二冊 荻生考」収載。なお、その影印は、荻生観ほか著・大庭脩解題「国立公文書館内閣文庫蔵 名家叢書 下」（関西大学東西学術研究所資料集刊十二・三、一九八二年、関西大学東西学術研究所）に収録される。
- (14) 『幕府書物方日記三』（大日本近世資料、一九六六年、東京大学出版会）九～一三頁。私に「マママ」を加えた。
- (15) 前注（2）参照。
- (16) 大庭脩「享保時代の日中関係資料三ハ荻生北溪集」三七頁、「荻生北溪・徂徠と樂書校閲」（『東方学』第九一輯、一九九六年）一二頁、『漢籍輸入の文化史——聖徳太子から吉宗へ』（一九九七年、研文出版）二二三頁、『徳川吉宗と康熙帝——鎖国下での日中交流』（一九九九年、大修館書店）二二七頁。
- (17) 陶徳民「荻生徂徠の『樂書』校閲とその所産」六四～六八頁。
- (18) 印藤和寛「富永仲基『三器』度考の復原——『樂律考』の一考察」四五頁、『富永仲基の「樂律考」——儒教と音楽について』二二九頁、『荻生徂徠の佚書『大樂発揮』復原のために——徳川吉宗による古楽復興の試みと徂徠の音楽思想』（大阪青山短期大学研究紀要）第三六号、二〇一三年）二二、三〇～三一頁。
- (19) 拙稿「荻生徂徠著『樂律考』の成立時期に関する一考察——荻生北溪著『樂律考解』（無窮会専門図書館神習文庫所蔵）の紹介を兼ねて」（『無窮会「東洋文化」復刊第一一三号、二〇一六年、及び「荻生徂徠著『樂律考』の執筆時期——『大樂発揮』五篇と樂書十卷（逸書）の關係性に着目して』（『國學院大學北海道短期大学部紀要』第三四巻、二〇一七年）。
- (20) 「荻生徂徠著『樂律考』の執筆時期（承前）——他の著述との照合による比定、及び従来の説に対する再検討」（『國學院大學北海道短期大学部紀要』第三五巻、二〇一八年）。
- (21) 拙稿「荻生徂徠著『樂律考』の成立時期に関する一考察——荻生北溪著『樂律考解』（無窮会専門図書館神習文庫所蔵）の紹介を兼ねて」三三～三四頁、拙著「国宝『碣石調幽蘭第五』の研究」一一八～一二〇頁など参照。
- (22) 【資料二一】～【資料二六】の翻刻においては、句読点と並列点を加え（ただし【資料二一】の「秦王」から「撥合」、【資料二二】の「文獻通考」載巢笙）以下の部分のみは、句点が施されているため、適宜句点を読点と並列点に改め、また並列点を補った、漢字は原則として正字に統一し（ただし【資料二二】末尾の候文においては、助詞「と」に当たる「与」、及び【資料二四】の琴の部位名を表す「岳」などは、底本のままとした、漢字の反復記号は「々」に、あるいは適宜該当する文字に改めた。仮名の合字等は通行の字体に、仮名の反復記号は該当する文字に改め、仮名の濁点を補い、送り仮名の不足を（）内に補った。なお、【資料二一】の漢字片仮名交じり文中に散見する漢文体の箇所には、右傍の（）内に書き下しを添えたが、末尾の候文は、送り仮名の不足や書き下しを加えることはせず、底本のまま翻刻した。また、書名には「」を、他文献からの引用の箇所には「」を加え、割注及び小字で記された語句は、（ ）内に示した。

必要に応じて、譜字や楽器部位などの専門用語にも「」を加えた箇所がある。【資料二一三】では、詩題にも「」を加えた。【資料二一六】では楽譜名に「」を加えた。さらに、代字、通用字、及び誤記と思しき箇所には、右傍に〈ママ〉と記し、脱字あるいは虫損・破損等で文字が欠けている箇所は□で、難読、未読の文字は■で表記し、推定できる場合はそれを右傍の（）内に記した。なお、闕字の箇所は右傍に〈闕字〉と記し、行末に至らずに特に改行されている箇所、一行開けている箇所は、底本の通りに翻刻した。

(23) この一箇所のみ訓点(レ点)が施されている。

(24) 「ッ」からこゝまでは、おそらく、徂徠が吟味した『三五要略』の写本に見える譜字の字体や難読字などをメモしたものと推測されるが、省略せずに翻刻した。

(25) 底本では「薺栗」と記すが、「薺」を「薺」に改めた。以下同。

(26) 底本では「麿」と見えるが、「磨」とした。

(27) 「ハ」に見えるが、「ハ」または某字の略字かもしれず、不明。以下の二箇所についても同様。

(28) 写真複製版では、「折」から「曲」まで線が引いてあるように見えるが、原本未見のため不詳。

(29) 写真複製版では、「大堤」の上に線が引いてあるように見えるが、原本未見のため不詳。

(30) 『三五中略』校正御用という出来事は、荻生家先祖書(由緒書)に記載され(前注(2)参照)、「有徳院殿御実紀」巻二四の享保十二年六月六日の条にも、「荻生惣右衛門茂卿に三五中略校正の事仰付らる。これは大和國吉野山吉水院より出しと聞えし。」(徳川実紀) 第八篇、四三〇頁)とあり、よく知られるものの、この『三五中略』が何を指すのか、実態は未詳である。今中寛司氏は、これを『三五要略』のことであるとし(『徂徠学の史的研究』(一九九二年、思文閣出版) 一三〇頁)、大庭脩氏は『三五中略』の誤記(享保時代の日中関係資料三八荻生北溪集Ⅴ四〇頁)とみなし、吉川良和氏は「物部茂卿琴学初探」

『東洋文化研究所紀要』第九二冊、一九八二年)一四頁にて、「藤原孝時の撰と伝えられる『三五中略』(12巻)の抄本」と述べておられる。この問題については、関連性が窺える【資料二一一】【資料四】を併せて参照しながら、今後、慎重に考証したい。

(31) 『楽律考』『楽制篇』の概要については、拙稿「荻生徂徠の楽律研究——主に『楽律考』『楽制篇』『琴学大意抄』をめぐる」五〇六、八九頁など参照。

(32) 『楽律考』の第八証に、「求諸樂器、黃鐘調聲爲周・漢黃鐘、則巢笙除第五・第十三管、外十七管排聲、與今笙十七管者皆合焉。是證八」とある(内閣文庫所蔵『名家叢書』第五七冊「荻生考」収載「楽律考」に拠り、漢字を正字に統一し、読点を適宜句点に改め、並列点と「〈ママ〉」を加えた)。

(33) 荻生観ほか著・大庭脩解題『国立公文書館内閣文庫蔵名家叢書下』一五六―一五八頁。なお引用においては、正字に統一し、濁点を補い、( )内に送り仮名を補った。

(34) 内閣文庫所蔵「経」『楽律全書』第一六冊に拠り、句読点、及び「」と「」を加えた。

(35) なお、この「古秋風楽」(ないし「古秋風辞譜章」とは全くの別曲ではあるが、徂徠は、日本に残存する琴の指法書『琴用指法』後水尾本(後の注(40)参照)の紙背に、日本雅楽の唐楽曲の一つである「秋風楽」の笛譜と歌辞が記されているのを見つけ、これを琵琶譜に変え、「秋風楽章」として残している。詳しくは、拙著『国宝『碓石調幽蘭第五』の研究』一四七―一五一頁。

(36) 漢字は正字に統一し、仮名の合字を通行の字体に改めた。「一、唐音俗語」には二重線が引かれている。省略箇所は〈省略〉と表記した。

(37) 『徂徠先生手沢集』については、松村宏先生からご教示、ご貸与いただいた。

(38) 拙著『国宝『碓石調幽蘭第五』の研究』三四、九二、一一七頁、及び京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター「近世日本における儒

学の楽思想に関する思想史・文化史・音楽学的アプローチ」二〇一五年七月十八日共同研究会での配布資料「荻生徂徠の琴学とその周辺」一〇頁など。

- (39) 【資料三】の翻刻においては、句読点を加え、漢字は原則として正字に統一し(ただし助詞「と」に当たる「与」は、底本のままとした)、書名・譜名には「」を加えた。

- (40) 【幽蘭】(碣石調幽蘭第五)は、<sup>きん</sup>琴の現存する最古の楽譜で、書写年代は唐代七世紀から八世紀前半とされる。日本に伝存し、現在は東京国立博物館所蔵 [TB1393]。六世紀後半頃、中国南朝の梁、陳において演奏、伝承されていた琴曲「幽蘭」(別名「倚蘭(ぎらん)」を記譜したもの。なお、この楽譜の序文には全く言及されてはいないが、別に、蔡邕撰『琴操』、郭茂倩撰『樂府詩集』等の多くの文獻に、孔子が「倚蘭操」別名「幽蘭操」という曲を作ったという故事が見え、よく知られることから、徂徠は「幽蘭」の曲を、孔子の作った曲とみなしていた。また、徂徠が見た『琴用指法』(後水尾本と仮称。現在彦根城博物館所蔵井伊家史料 [V63])『琴用指弾法』が、徂徠が見た『琴用指法』(後水尾本そのものと判断する)は日本のおよそ中世の写本であり、その内容は、南北朝から隋・唐の七世紀前半までに成立したと推測される琴の指法書を併せ写したものとみられる。『幽蘭』と『琴用指法』及びこれらに対する徂徠の研究の詳細については、拙著『国宝「碣石調幽蘭第五」の研究」など参照。

- (41) 拙著『国宝「碣石調幽蘭第五」の研究」一〇五―一七頁。

- (42) 実際に、奈良の法隆寺には、楽器内部に開元十二年(七二四)と墨書される琴が伝存した(現在は東京国立博物館所蔵[法02])。徂徠が果たして、この琴の図を見ることができたか否かは不明。徂徠没後、鈴木蘭園(一七四一―一七九〇)が法隆寺の琴を実見・実測し、『雷琴記』を著したことは、よく知られる。なお、徂徠の『琴学大意抄』の「琴ノ名所ノ事」及び「琴ノ廢レタル故ノ事」の章には、この【資料三】第三条に述べたことと同様の見解が見える。

- (43) 【資料四】の翻刻においては、句読点を加え、漢字は原則として正字に統一し、仮名の反復記号は該当する文字に改め、仮名の濁点を補い、送り仮名の不足を( )内に補った。

- (44) 「次イデニ」か、「次二」と読むのか判断できなかったため、送り仮名は補わなかった。

- (45) 底本では、「墨」字の上に圈点を記し、その傍らに「藍」と書き入れである。見せ消か、脱字を書き入れたものか判断できなかったため、とりあえず底本のとおりに翻刻した。

- (46) 前注(2)、(30)参照。

- (47) 小林龍彦「中根元圭の研究(Ⅰ)」(『数理解析研究所講究録』第一七八七巻、二〇一二年)、「建部賢弘と中根元圭」(『数学文化』第二二号、二〇一四年)参照。

- (48) 遠藤徹「中根元圭著『律原発揮』の音律論に関する覚え書き」(『東京芸芸大学紀要・芸術・スポーツ科学系』第六六集、二〇一四年)等に詳しい。

- (49) 『度量考』は、前述したとおり(注(12)参照)、徂徠没後に遺稿が將軍吉宗に献上され、その後、北溪著「衡考」を加えて公刊された官刻『度量衡考』に、「平璋閣」と見える。

- (50) 『皇和通曆』には、「享保乙巳冬十月朔東都物茂卿序」と記す徂徠の序文「皇和通歴序」を収載し(内閣文庫所蔵[C4-125]寛政五年後修刊本を参照)、延享二年刊『荀子全書』には、「享保乙巳十月朔」「三河物茂卿題」と記す徂徠の跋文「刻荀子跋」を収載する(内閣文庫所蔵[C98-35]を参照)。また『徂徠集』にも、巻九に「皇和通歴序」が、巻一八に「刻荀子跋」が収載されている。

- (51) 川原秀城、池田末利編輯『荻生徂徠全集二・三統治論二』(一九八七年、みすず書房)所収「解題・凡例」四四五―四四六頁、高橋博巳「江戸のバロック―徂徠学の周辺」「中根元圭と荻生徂徠」(新装版一九九七年、ベリかん社)、澤井啓一・岡本光生・相原耕作・高山大毅訳注『徂徠集 序類2』(東洋文庫八八〇、二〇一七年、平凡社)二二一―二

二三頁参照。

- (52) 城山陽宣「関西大学泊園文庫蔵自筆稿本目録稿——その(1)」(関西大学東西学術研究所紀要) 第四四輯、二〇一一年) 六二～六四頁、吾妻重二編「関西大学泊園文庫自筆稿本目録稿(甲部)」(二〇二二年、関西大学アジア文化研究センター) 一～二頁には言及されていない。

- (53) なお、これら四通が、時系列で書写されているか否かは不明である。四通の末尾には、日付が次の如く記されている。一通目【資料五一】「八月十五日」、二通目【資料五二】「五月望」、三通目【資料五三】「極月十五日」、四通目【資料五四】「三月十五日」。

また、以下の【資料五一】と【資料五四】の翻刻においては、句読点と並列点を加え、漢字は原則として正字に統一し、仮名の変体・合字等は通行の字体に改め、書名には「」を加えた。難読の文字は■で表記し、推定できる文字を右傍の( ) 内に記した。

- (54) 「周尺考」(「荻生徂徠全集一三 統治論二」三二九頁)、及び弟北溪が徂徠と自身の見解を報告した『名家叢書』第六二冊「荻生考」収載「楽律ノ考」においては、元圭のことを上右衛門と記している。

- (55) 注(2) 参照。

- (56) 「荻生徂徠年譜考」一四八～一五一頁。

- (57) 田中有紀「朱載堉の十二平均律における理論と実験」(川原秀城編『中国の音楽文化——三千年の歴史と理論』アジア遊学二〇一、勉誠出版、二〇一六年) 等に詳しい。

- (58) 「律原発揮」に、「璋雖未曾見律呂精義」とある(『日本経済叢書』巻二、一九一四年、日本経済叢書刊行会、一〇五頁)。

- (59) 筆者はこの問題について、詳しく理解できていないが、遠藤徹「中根元圭著『律原発揮』の音律論に関する覚え書き」九六頁によると、「空圀は体積を求める上で重要となるため、中根元圭がこだわったものの一で」(「律原発揮」の)「黄鐘生度」の節において独自の説を唱えている。」という。

- (60) 田中有紀「朱載堉の十二平均律における理論と実験」九〇～九一、

一〇六～一〇八頁参照。

- (61) 遠藤徹「中根元圭著『律原発揮』の音律論に関する覚え書き」八六頁。

- (62) 澤井啓一・岡本光生・相原耕作・高山大毅訳注『徂徠集 序類2』二二三頁。

〔謝辞〕 本稿の執筆にあたり、荻生家所蔵文書の利用をご快諾くださいました荻生美智子氏、資料の利用に際して労を執ってくださいました平石直昭先生(東京大学名誉教授)、資料の閲覧と利用を許可してくださいました東京女子大学図書館と関西大学図書館、資料に関する情報を教えてくださいました松村宏先生(慶應義塾大学名誉教授)と小島康敬先生(国際基督教大学教授、書簡翻刻に際してご教示くださいました高橋由彦氏(國學院大學北海道短期大学部)に、感謝申し上げます。また、二〇一八年二月十八日の京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター共同研究会「近世日本における儒学の楽思想に関する思想史・文化史・音楽学的アプローチ」(代表者、武内恵美子先生)にて、本稿第二、五章の内容を発表(題目「荻生徂徠の音楽に関する新出資料の紹介——特に「三五要略考」と音楽に関する覚え書き、及び中根元圭に宛てた書簡を取り上げて」)した際には、研究会の諸先生方から貴重なご意見を賜り、書簡の判読の誤りを高橋博巳先生、小島康敬先生、山田淳平先生から指摘頂きまして、訂正することができました。ここに記して御礼申し上げます。

〔付記〕 本稿は、平成二十九年 日本学術振興会 科学研究費助成金 基盤研究(C)「荻生徂徠の音楽に関する著作、及び研究と実践について——基礎的研究から全貌解明へ」(代表 山寺美紀子、課題番号17K02305)による研究の一部である。







一 契符ト時受ナシ大抵ハ杜撰ノ條ニ依リコリ  
 ケルト云フ見ナリナシ  
 一 通曆序前ニ序説ニ當テ教充ニ得暇ナリ  
 五 契符ト云テ則チ序説ニ依リテ  
 一 契符ト云テ序説ニ依リテ  
 中ニ出先府ニ依リテ序説ニ依リテ  
 學ニ依リテ序説ニ依リテ  
 模倣ニ依リテ序説ニ依リテ  
 新法ニ依リテ序説ニ依リテ  
 能ク用保長ニ依リテ序説ニ依リテ

五 契符ト云テ序説ニ依リテ  
 中ニ出先府ニ依リテ序説ニ依リテ  
 學ニ依リテ序説ニ依リテ  
 模倣ニ依リテ序説ニ依リテ  
 新法ニ依リテ序説ニ依リテ  
 能ク用保長ニ依リテ序説ニ依リテ

一 契符ト云テ序説ニ依リテ  
 中ニ出先府ニ依リテ序説ニ依リテ  
 學ニ依リテ序説ニ依リテ  
 模倣ニ依リテ序説ニ依リテ  
 新法ニ依リテ序説ニ依リテ  
 能ク用保長ニ依リテ序説ニ依リテ

一 契符ト云テ序説ニ依リテ  
 中ニ出先府ニ依リテ序説ニ依リテ  
 學ニ依リテ序説ニ依リテ  
 模倣ニ依リテ序説ニ依リテ  
 新法ニ依リテ序説ニ依リテ  
 能ク用保長ニ依リテ序説ニ依リテ

七丈、地九、折、一、分、解、遠、る、目、及、て、一、

徑七丈ノ兔抱ハサヲ擧トグルヘキ標ヲサノ上ニテ一ツ方

石上之屋也

理上之虛証而實之

道徳を重んずる

名位社冲、密辛、飞字、寸、以、初冲之、口、失

[illegible]

龍溪先生文集

帝座内天子宮  
 國不三十三  
 一

大芝ヤリタニモサキノハナモ台カス(来)輝

六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十

子  
家  
百  
之  
家  
事  
上  
云  
十  
五  
年  
術  
之  
美  
也

今  
ありし  
イカニナモ  
孝取  
説  
本  
校正  
以  
方  
圓

い左のあふし且又律令より一戸宛に

子作越山收道多難所呈下支年

律算より八管厚より一尺の廢を故半律にて

子<sub>三</sub>、<sub>一</sub>年戴<sub>五</sub>墳<sub>六</sub>女<sub>七</sub>服<sub>八</sub>委<sub>九</sub>細<sub>十</sub>禱<sub>十一</sub>管<sub>十二</sub>處<sub>十三</sub>管<sub>十四</sub>

長  
お  
應  
ふ  
寸  
半  
律  
も  
三  
行  
の  
尺  
に  
し  
宿  
國

辛ニ多ハルユニ半徑ヲ又ノ名カト云フ注シテ注ス

管長打雁番國志云今雁白客方寸

中密府三庫中一宋三庫密府具六

同治庚午年







# On five recently-discovered documents on music by OGYŪ Sorai

YAMADERA Mikiko

This paper presents five newly-identified documents on music, written by OGYŪ Sorai (1666–1728). It first introduces two letters from the second month of 1720 (Kyōho 5) responding to questions posed by ARIMA Ujinori (1668–1736), a close confidant of the eighth shōgun of the Edo *bakufu*, TOKUGAWA Yoshimune. They describe the measurement system used in the Chinese Zhou Dynasty and changes in musical tonal systems and metrological standards over successive periods. This is followed by OGYŪ's notes on his work, *Sango Yōryaku-kō* (Reflections on *Sango Yōryaku*; believed to have been written in 1727 [Kyōho 12]) and on the music accompanying it. *Sango Yōryaku-kō* talks about a manuscript copy of *Sango Yōryaku* — a collection of musical notations for the Japanese *gagaku biwa*. The third document discusses historical materials concerning the seven-stringed *qin*, its strings, tonal system, and modes. The fourth, written in the fifth month of 1727, discusses a work on music theory formerly held by the Kissui-in monastery. These four manuscripts are contained in historic documents owned by the OGYŪ family. For the purpose of presenting their contents, I have transcribed facsimile copies available in the Masao Maruyama Collection at the library of the Tokyo Women's Christian University. The fifth and final item comprises copies of four letters from OGYŪ which were contained among FUJISAWA Tōgai's manuscript copies in the Hakuen Collection at the Kansai University Library. In my opinion, OGYŪ most likely wrote them in 1725 (Kyōho 10) to the scholar of calendrical calculations, NAKANE Genkei (1662–1733), at around the time that the *bakufu* ordered OGYŪ to review Zhu Zaiyu's musical treatise, *Yuelü quanshu* (Complete compendium of music and pitch). From these letters, I have selected the parts concerning music and present them in transcription.

キーワード：荻生徂徠 (OGYŪ Sorai)、有馬氏倫 (ARIMA Ujinori)、中根元圭 (NAKANE Genkei)、『三五要略』 (*Sango Yōryaku*)、『樂律全書』 (*Yuelü quanshu*)

